

7908「わたしは、アメリカで生まれ、・・・」

「わたしは、アメリカで生まれ、アメリカの食べ物で育ち、アメリカ語で話してきた。学校では成績もよくて、級長もつとめたけれど、それでもみんなはわたしをジューと呼ぶの。どんなに努力しても、けっしてみんなはわたしを仲間にしてくれなかった。

その上、わたしは三女でしょ。父は男の子をすごく欲しがっていたから、わたしが生まれたときは、一言、"She is a girl."といったそうよ。この一言で、わたしは両親にも見放されてしまったようなもの。わたしは医者になりたかったけど、父は、女はどうせ嫁にいくんだから、pretty ならばいい、といって十分な教育をしてくれなかったわ。

わたしは、ジューに生まれ、女に生まれたので、二重の差別に悩みつづけてきたのよ。」
カレンは「わたしはずっと不幸だった」という。

「ルーズベルト島 575 番地」(雑誌「モア」1978 年 12 月号)

[許容訳例]

"I was born and grew up in America, eating American food and speaking American. I got good grades in school and was even class president. But they always called me "the Jew." They never took me into their circle in spite of all my efforts to be one of them.

Besides, Father badly wanted a son; as you know, I was the third daughter in my family. I've heard that he said only one thing—"She is a girl!"—when I was born. I feel that this one phrase somehow separated me from my parents. I wanted to be a doctor, but Father didn't give me enough education, because he thought that girls got married anyway and that the only important thing for them was to be pretty.

I've always suffered a double discrimination—because I was born both a Jew and a girl."

"I've had an unhappy life," says Karen.

[翻訳例]

"I was born in America, and grew up eating American food and speaking the American language. I got good grades in school, and was even president of the class at one stage. Even so, the others always called me "the Jew"; however much I tried, they would never accept me as one of them.

On top of that, you see, I was the youngest of three children, all girls. Father desperately wanted a son; when I was born the only thing he said, apparently, was; "She is a girl!" It was almost as though my parents had vanished their hands of me with that one phrase. I wanted to be a doctor, but Father didn't give me enough schooling; as he saw it, girls got married anyway, so all they needed was to be pretty.

I've always suffered a double discrimination—because I was born a Jew and because I was born a woman."

“I was always unlucky,” said Karen.

■わたしは、アメリカで生まれ、アメリカの食べ物で育ち、アメリカ語で話してきた。(7908)

★「わたしは、アメリカで生まれ」は「わたしはアメリカで生まれた」ですから I was born in America.です。これは過去の事実ですから過去時制です。

★「アメリカの食べ物で育った」は I was brought up [reared] on American food.です。これも過去の事実ですから過去時制です。

★「アメリカ語で話してきた」は「今まで」と「これからも」が含まれるので I have always spoken American.と現在完了にしてもいいです。それから「アメリカ語(American)」は、すぐ前で同じ単語を形容詞として使うので、ここでは the American language とする方がいいでしょう。

● [連用形] + [連用形] + 主動詞

「～で生まれ [連用形], ～で育ち [連用形], ～で話してきた」の [連用形] は「並置」ですから and で結ぶことになるのですが、それぞれの前で「～で」が使われています。最初の「で」は場所を表しています。二つ目の [で] は、「動詞(食べ) + [て]」をはしよった [で] ですから、実質は「食べ [て]・・・した」の形態です。三つ目の「で」は目的語を表しています。ですから後の二つは「～を食べ、～を話して育った」とまとめることができます。そうすると、これは「・・・して・・・した」ですから「主動詞(grew up) + 句(eating...and speaking...)」の形で処理することが出来るので、ここは I was born in America and grew up eating American food and speaking the American language.と連結することになります。

■学校では成績もよくて、級長もつとめたけれど、それでもみんなはわたしをジューと呼ぶの。(7908)

★「学校では成績がよくて・・・」は、学校時代は終わっていると考えられるので「学校では成績がよかった」とします。I got good grades at school.とか My grades at school were good.でしょう。イギリス英語なら I did well at school.です。

★「級長もつとめた」の中には「級長をつとめたこともあった」という意味が含まれているようなので、I was even president of the class at one stage.くらいでしょう。

◆唯一の役職名補語は無冠詞

「級長」は「唯一の役職名」なので、補語に使われた場合には無冠詞です。

● [て] と [けれど]

ここの [て] は「順次」でから and です。それから [けれど] は「逆接」ですから but ですが、コンマを打って But,...と However,...の代わりのように使うのはよくありません。but を使うならコンマはいりません。

★「それでも」は even so あるいは all the time です。

★「みんなはわたしをジューと呼んだ」の「みんな」は「わたし以外の他の人たち」のことですから、場合によっては「一般の人たち」あるいは「当局」の感じになる they より the

others がいいと思われます。

★「ジュー」は、当時の他の人たちが言った特別用語として使われているので、引用符に挟んで“the Jew”とするのがいいでしょう。

★「～と呼ぶの」は「～と呼んだの」ということですから、ここは The others always called [used to call] me “the Jew.”です。

■どんなに努力しても、けっしてみんなはわたしを仲間にしてくれなかった。(7908)

★「どんなに努力しても」は In spite of all my efforts とも言えますが、これは文語で会話文ではちょっと堅いので、ここでは However much I tried がいいでしょう。

★「けっしてみんなはわたしを仲間にしてくれなかった」は they never took me into their circle でもいいですが、もう少しやわらかくして they would [They'd] never accept me as one of them とも言えます。

■その上、わたしは三女でしよ。(7908)

★「その上」は besides か on top of that です。

★「三女でしよ」の「三女」ですが、女の子が三人の中の三番目の女の子のことですから、日本語をそのまま変換すると I was the third daughter in my family. ですが、すぐ後に「父は男の子を欲しがって・・・」と続きますから、子供は女の子ばかりと考えられます。とすれば、I was the youngest of three children, all girls [daughters]. とするのがよいと思われます。

■父は男の子をすごく欲しがっていたから、わたしが生まれたときは、一言、“She is a girl.” といったそうよ。(7908)

★「男の子」は a boy でいいのですが、父親が男の子を欲しがるというのを、「仕事や家を継がせること」を念頭に置いているとしたら a son も使えます。

★「すごく欲しがる」ですが、be eager to…には「待ち遠し」という感覚が含まれていて、たとえば、I am eager to read that book.とか They are eager to have a child.というように使います。したがって、「すごく欲しがっていた」に be eager to も使えますが、ここでは前後に「待ち遠しい」という感じをはっきり示すものがないので、Father desperately [badly] wanted…の方が（発言者の冷たい感情が含まれて）いいでしょう。

● [から]

「ほしがっていた [から]」は「理由」として so でもいいのですが、セミコロン(;)にして、次の[・・・とき] (when…)とつなぐこともできます。

● [ときは] (私が生まれたときは)

「私が生まれた [ときは]」は「私が生まれた [ときには]」で、すでに話題になっている了解情報ですから when I was born として前に出すことができます。

★「一言」ですが、「この一言で」のような場合には only one phrase が使えますが、ここでは、「一言・・・と言った」ですから、he said only one thing…か、あるいは「連体修飾節（一言言った）＋不定代名詞的体言（こと）」と変えて「不定代名詞的名詞(only one thing)＋関係詞節((that) he said)」として only one thing he said was…とすることもできます。

◆「人称代名詞の使い方」(She is a girl.)

前後の文脈で、たとえば、「女の子だから弱い」とか「女の子だからこの遊びには入れない」とかの場合なら“(Because) she is a girl.”と使いますが、教室での練習以外、I am a boy.とか You are a girl.とか She is a girl.という文はほとんど使いません。出産を待っていた父親が看護師さんに「男の子ですか女の子ですか」と尋ねた場合でも、看護師さんは、普通「赤ん坊」は中性なので、“It’s a girl.”と言います。ここでは、父親が何か別の場面で、たとえば、上に示したような理由として“She is a girl.”と言ったのがこの娘の記憶に残っていたのでしよう。英語的には問題がありますが、そのまま使います。

●主観連結 [・・・そうよ]

[・・・そうよ] は、I heard that…も It seems that…も可能ですが、このような会話では堅い感じがします。apparently がいいでしょう。この単語は obviously という意味より「・・・らしい」という意味で使う方が圧倒的に多いです。

■この一言で、わたしは両親にも見放されてしまったようなもの。(7908)

★「この一言で」は on that one phrase です。この one は single の意味です。

★「見放される」は難しい。give up on a person (人に愛想をつかす；人を諦める) は使えません。ここでは「もう責任を持たない；関心がない；手を引く」という意味の vanish one's hands of ~ がよいと思います。He vanished his hand of me.です。

●主観連結 [・・・ようなもの]

[・・・ようなもの] ですが、It seems to me that…は「論理的に考えてこういう結論になった」ということですから、ここでは使えません。ここの [・・・ようなもの] は It was (almost) as though…とします。

■わたしは医者になりたかったけど、父は、女はどうせ嫁にいくんだから、pretty ならばいい、といって十分な教育をしてくれなかったわ。(7908)

★「わたしは医者になりたかった」は I wanted to be a doctor.です。文法的には to become a doctor でもいいのですが、多分、子供の頃、What do you want to be when you grow up?などと尋ねられて、I want to be a pilot.などと答えていたから習慣的に be を使います。論理的には、ここは前に want という意志を表す動詞があるので、さらに意志を表す become を重ねたくないのです。

● [けど] (逆接)

[けど] は逆接で but です。

◆無冠詞複数「女はどうせ・・・」

「女は嫁にいく」の「女」は、ここでは「女の子」でしょう。しかも一般論として言っているのですから、無冠詞複数で girls…です。

★「どうせ」は anyway ぐらい。

★「嫁にいく」が難しい。普通は leave home to get married; be a bride を使いますが、ここでは Girls get married anyway. ぐらいでしょう。

● [だから] (理由)

ここの [だから] は軽く so ですが、書き方によっては because も使えます。

★「pretty ならばいい」は all they needed was to be pretty です。この all は the only thing ということです。もう少しやわらかく It was enough for them to be pretty. でもいいです。なお、Nothing was more important for them than being pretty. とは言えません。これは There are many important things, but the most important thing is to be pretty. の意味です。ここは、簡単に言うと To be pretty is enough. の意味ですから。

◆地の文の直接話法文「・・・といって、・・・」

日本文では、直接話法の文を平気で地の文に入れます。英語的には「父は、「女はどうせ嫁にいくんだから、pretty ならばいい」といって・・・」なら he said... と直接話法が使えるのですが、ここでは間接話法にするしかありません。さらに、ここの「といって」は「という見解・意見によって」ということです。したがって、in his view とか as he saw it とか、あるいは he thought that... としなければなりません。

★「十分な教育をしてくれなかった」の「教育」ですが、ここでは「学校教育」と考えられるので education より schooling を使って Father didn't give me enough schooling. とするのがいいでしょう。

■「わたしは、ジューに生まれ、女に生まれたので、二重の差別に悩みつづけてきたのよ。」 (7908)

★「悩む」ですが、ここでは enjoy (よい経験をする；楽しむ；持つ) の反意語としての suffer (悪い経験をする；苦しむ；悩む) が適しています。

●連用形 [・・・れ]

「生まれ [連用形], ... に生まれた」は「順次」ですから and です。

● [ので] (因果)

「わたしは・・・[ので], 二重の差別に悩みつづけてきたのよ。」は because を使って I've always suffered a double discrimination, because I was born a Jew, and because I was born a woman. と書くことができますが、ここは日本文で多く用いられる「連体修飾節＋特定名詞」(・・・したわたしは・・・) と処理して、Being born a Jew and a woman, I've always suffered a double discrimination. とすると、すっきりし、むしろ元の日本文に近いと思われます。

■カレンは「わたしはずっと不幸だった」という。(7908)

★「不幸」ですが、ここでは「何もかも思い通りにならなかった」という意味で unhappy より unlucky の方がよいと思われます。

◆過去時制か現在完了か (ずっと不幸だった)

「ずっと不幸だった」は I was always unlucky. ですが、不幸が今も続いているなら現在完了にすることになります。